

幸福の倫理と人間革命

江口 満

はじめに

本稿は、ギリシャのロードス島で開かれた第四回『ワールド・パブリック・フォーラム』の分科会「平和のための宗教間対話」での発表のために筆者がロシア語で書いた原稿を邦訳し、加筆したものである。

平和は、ひとりひとりの幸福なくしてありえないものであり、また人々の幸福は、平和なくしてありえない。本稿は、人間の幸福を築くうえで、宗教は私たちに何を示唆し、与えるのかという問題を仏法者の立場

から考察するものである。

1

幸福とは何であるかをめぐって、古今東西、さまざまに考察がなされてきた。牧口常三郎（創価学会初代会長）は、幸福こそ人生の理想であり、幸福以外に人生の理想があるとすれば、「それは幸福概念が包含する内容の見解の相違するによつて現われたもの」、もしくは「幸福の要素又は部分を全体と誤解するに基づくものではないか」¹と述べている。幸福とは、一般的には

欲求が満たされたときに感じる満足感、充足感という意味である。幸福を一樣に定義するのはむしろかしいが、古来、幸福観は快樂を中心に考えられてきた。

古代ギリシャのアリストテッポス（BC四三五頃―BC三五五頃）は、「幸福は快樂である。人間にとって直接体験できるものは快樂だけである」として、感覚的な快樂を幸福の内容であるとした。また近代でも、功利主義者ベンサムは「最大多数の最大幸福」を唱えたが、これもまた快樂をもつて幸福とする立場であった。

しかし、感覚的な快樂の追求を専らにしている先進諸国社会について、マザー・テレサは次のように語っている。

「世界中を見渡してみると、貧困は経済的に貧しい国々にだけあるわけではありません。西洋にも、いやしがたい貧しさがあります。〈中略〉社会から疎外され、不必要とされ、愛されることもなく、孤独でおのっている人の貧しさは、根が深いものです。その貧しさをいやすことは難しい」⁽²⁾

経済大国日本でも、国内では昨今の親殺しや子殺し

などの悲惨な事件があいつぎ、引きこもりやニートなどの問題が深刻化している。

ラッセルは、「人生の主要目的として競争をかけるのは、あまりにも冷酷で、あまりにも執拗で、あまりにも肩ひじはった、ひたむきな意志を要する生きざまなので、生活の基盤としては、せいぜい一、二世代ぐらいしか続くものではない。その期間が過ぎれば、それは神経衰弱や、種々の逃避現象を生み出す」⁽³⁾といっているが、はからずも高度成長時代をひと昔前に経たわが国の現状をいいあてたものとなっている。

一方、道徳的な観点から幸福をとらえた多くの思想も残されてきた。

富も名誉もほしきままにしながら、やがてその価値を否定するにいたったトルストイは、「人生の目的は幸福であり、その幸福は今いる場所で得られるのである。真の幸福は常に私たちの手中にあり、それは善の生活に、影のごとく寄り添うものである」⁽⁴⁾と述べている。

「善の生活」をしていくにあたって、最大の障碍となるのは、人間のエゴである。エゴのために、たとえ

善とわかっていても、それができない、悪とわかっていても、悪に手を染めてしまうことが、往々にしてある。

このエゴをいかに克服するのか。池田大作氏（創価学会インタナショナル会長）は、トインビーとの対談の中で、心ある多くの人々が自らのエゴイズムを乗り越えるために、多大な努力を払ってきたが、そうした利他の精神が限られた一部の人にしか体现できなかったことを大きな問題としている。⁽⁵⁾ 現代人の道徳的水準は、科学技術の進歩とはうらはらに、かえって低下の傾向にあるが、「それは、技術の進歩によって勝ち得た力が、道徳の果たしてきた役割を代替してくれるかのような錯覚に陥った、人間の愚かさに起因しています。私はこの錯覚から抜け出すことが、人間の自ら招いた現代の危機を解決する、出発点であると思います」⁽⁶⁾——池田氏はこのように分析している。

さらに、そのためには、「一個の人間の意識の奥底から、すなわち全人間的に、改革することが要請され」⁽⁷⁾ると述べている。この全人間的な改革のことを池田氏は、

「人間革命」と呼んでおり、これが幸福を達成するための不可欠な道だとしている。幸福について論じる中で、池田氏は単なる欲望の充足にともなう浅い幸福感であり、環境の変化で崩れうるものを相対的幸福とし、外的な要因では崩れないものを絶対的幸福としている。また、師・戸田城聖（創価学会第二代会長）の言葉を借りて、「絶対的幸福というのは、どこにいても、生きがいを感じる境涯、どこにいても、生きている自体が楽しい」⁽⁸⁾境涯であると定義している。ここで相対的幸福は否定されてはいないが、何よりも、絶対的幸福を求めて自己変革を行っていくことの重要性が強調されている。

2

では、意識の奥底からの改革は、どのようにして可能となるのだろうか。池田氏は、世界百九十九カ国に広がる創価学会インタナショナルの指導者であり、多くの会員が氏の指導を人生の指針として、実践している。池田氏の教えは、日蓮仏法を根本としており、全人間的改革の方途として、慈悲の実践を要諦としている。

他者のために行動していくことによって、自身の変革がなされ、「自分自身の生命の泉も蘇生していく」のである。⁽⁹⁾池田氏の指導によって、そうした実践が数多くの人々によってなされているが、その中から、ひとつのケースを取り上げて、分析してみたい。

創価学会インタナショナルのメンバーであるスベイン舞踊家のアンジェラ・オリヴェラさんは、同僚からのいやがらせに悩んでいた。その悩みを同じく仏法者の友人に打ち明けたところ、彼の助言は、「その問題に正面から立ち向かうこと」というものであった。では、問題から逃げないで、解決するために仏法者が提案した具体的な方法とは何であったか。それは、「その同僚の幸せのために祈ってあげる」というものだった。⁽¹⁰⁾

アンジェラさんは最初、そんなことはできないと思った。相手は自分を敵視し、引きずりおろそうとしているのである。どうして、その人のために祈ろうという気持ちが起こるだろうか。しかし、友人は、だからこそ祈ることが大事なのだ、幸福な人は、人をおとし入れようとはしないものであり、何が同僚をそうさせ

ているのか、その人の気持ちになって考えてみることに大切であるということを語っていた。

これは、一見実行不可能とも思われる行為であろう。自分を苦しめている人に対して、私たちは、不快感はもっても、好意はいだかないものである。もし、その人のために祈れと強制された場合、手はあわせたとしても、ややもすると、心の中はやり場のない怒りと苦しみに満たされる、という偽善の姿となってしまいうだろう。

アンジェラさんは、祈りの中で、すさまじい心の嵐と戦ったにちがいない。悪意の同僚の幸せを祈るということは、自分の全存在をかけての精神闘争である。しかし、その祈りを続けていくうちに、やがて同僚は意地悪をしなくなり、それどころかかえって親しい友となったという。

ここにあげた例は、特殊なケースではなく、数多くのSGIメンバーが実際に体験しているものである。これももし、稀な例であり、アンジェラさんの人格によるところが大きいものであるならば、本稿で取り上

げる意味も薄らいでしまっただろう。

この一見困難と思われる慈悲の実践が、いかにして、多数の人々がなしうるところとなつていたのであろうか。その理論的根拠を以下さぐつてみたい。

愛や慈悲は、宗教が共通して説く教えである。聖書には、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(マタイ五・四四)とある。この教えの根拠は、神に帰せられ、「あなたがたの天の父の子となるため」(マタイ五・四五)にそうするのである。「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからであ」(同)り、「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者とな」るための実践である(マタイ五・四八)。キリスト教の愛はこのように、「神の愛」を根本とした隣人愛であり、神が人間を愛するように、隣人を愛するのである。キリスト教的な愛は、前提として神の存在があつて可能となる。それによつて、人間同士の敵対関係の超越が理論的に可能となり、「汝の敵を愛せ」と説く根拠が成立する。

仏教においては、慈悲が根本的な徳であり、原始仏教においてすでに、慈悲の実践の必要性がうたわれている。

「あたかも、母が己が独り子を命を賭けても護るよ
うに、そのように一切の生きとし生けるものどもに對
しても、無量の(慈しみの)こころを起すべし。

また全世界に対して無量の慈しみの意を起すべし。

上に、下に、また横に、障害なく怨みなく敵意なき
(慈しみを行うべし)。

立ちつつも、歩みつつも、坐しつつも、臥しつつも、
眠らないでいる限りは、この(慈しみの)心づかいをし
っかりとたもて。

この世では、この状態を崇高な境地と呼ぶ⁽¹¹⁾

仏教において慈悲という実践倫理は、次のような人
間主義的な道理によつて根拠づけられる。つまり、ひ
とはだれでも自己を愛しているし、自己よりも愛しい
存在はない、それは他の人々にとつても同様であり、
故に自己を愛する者は他の自己をも愛し、護るのであ
る。⁽¹²⁾

しかし、あらゆる他者への慈悲の実践は、決して容易なことではない。そのため、そのような実践は、凡夫の力ではなかなか実現できるものではないから、慈悲のはたらきは、やがて専ら、仏が衆生を救済するために施すものとされ、凡夫は仏の力に頼るようになっていった。⁽¹³⁾ 観音信仰などがその例としてあげられる。法華経の観世音菩薩普門品において、釈尊が、観世音菩薩の名をひたすら唱えるならば、観世音菩薩が衆生の声を聞いて苦悩から救済してくれると説いている。その救済の内容が具体的に現世利益なことから、一般庶民の間で、観音信仰が広く流行した。

この観音信仰に関して、日蓮は「今末法に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る事は観音の利益より天地雲泥せり」と述べている。⁽¹⁴⁾ ここには、観音菩薩という外からの加護を期待するのではない、南無妙法蓮華経と唱え、祈ることによって、自分で自分を守るのだという主張がある。池田氏は、これについて、「自分の生命の観音菩薩の力で守られる」ということであり、「それを引き出すのが信心」⁽¹⁵⁾ であると解釈してい

る。氏は、観音菩薩を実体的な菩薩としてではなく、人間の心にそなわった慈悲のはたらきとしてとらえているのである。

観世音菩薩普門品には、個々の状況において、もし、観世音菩薩の名を称し、敬えば、救済されるであろうと具体的に書かれているが、戸田城聖は、その内容にそつて、外から救済してもらうのではなく、「信心」によって、自身を救済できるということを簡潔にまとめている。たとえば、「若し瞋恚多からんに、常に念じて観世音菩薩を恭敬せば、便ち瞋を離るることを得ん」⁽¹⁶⁾ との仏典の記述に即して、「相手が憎んだり、害を加えたりするときに、信心が強い（傍線江口）と、相手の心が変わつてしまふ」⁽¹⁷⁾ と展開している。

また池田氏は、日蓮がいう「天地雲泥」の利益について、「成仏する」という大利益のこと」として、それを「絶対的幸福」と結びつけている。⁽¹⁸⁾

さらに、「絶対的幸福」とは「生命力が絶対的に旺盛になる」ということでもあり、それは自己が「革命」されていくことによって、たくましく変わっていくの

だとしている。自己が革命されていくと、これまで「悩み」にひきずられていた自分が、今度は逆に「悩み」を引きずりまわし、悠々と乗り越えていけるのである⁽¹⁹⁾と。

とはいえ、相手に対するネガティブな感情を克服するのは、容易ではない。自己超克のむずかしさについて、池田氏は、それを妨げている力は、欲望や感情などの意識よりも、さらに深い次元にあるため、自己超克ができないことを、すべて意志的努力の欠如のせいにするのは、不当であるとしている。そして、「自己超克を妨げるものが意識下のものであるなら、それを可能にする力も意識の底から引き出す⁽²⁰⁾」方途を考えるべきであって、そうした力が、実は人間にはそなわっている⁽¹⁹⁾と池田氏は主張する。

では、意識の底から引き出すべきものとは何か。前述した「人間革命」は、いかにして可能となるのか――。

「人間革命」思想は、人間が感ずる生命状態を十界――十種類のカテゴリーに分けた仏法の生命観に立脚している。具体的には、「地獄」「餓鬼」「畜生」の「三

悪道」「修羅」を加えた「四悪趣」が不幸な状態で、平静な精神状態の「人」、刹那的な幸福感にひたる「天」までを加えて「六道」といい、一般に生命活動という場合、六道の内を出ることはなく、輪廻しているとされる。「そのようなはかない生を乗り越えて、恒久的な幸福を追求しようとするのが、仏法における実践⁽²¹⁾」であると池田氏は述べている。六道の上には、人生の真理を求め、部分的な悟りを得る「声聞」、⁽¹⁹⁾「縁覚」に続いて、利他の行為に喜びを見出す「菩薩」、菩薩の修行の結果として到達する「仏」がある。この仏界は、利他の実践を行うことによって現われるというのが、仏法の生命変革の原理である。

あらゆる生命は、これら十界を具しているが、さらに十界のそれぞれにまた十界が存在しているという「十界互具」の思想によって、あらゆる人に仏性がそなわっていることが説かれている。地獄界の苦しい状況にあったとしても、自身の仏性を覚知できる可能性はあるのである。

ただし、「仏性」があるといっても、それは、あくま

でも潜在的な可能性として示されているのであり、開発することが求められる。逆にいえば、「仏性」があるという前提によって、人間が変革できるという可能性が保障されるのである。つまり、人間革命は、「仏性」を具体的に顕現することであるともいえる。

いいかえれば、人間革命とは、自身と他者に「仏性」がそなわることを信じ、その「仏性」を最大に尊重することによって、それを顕現させていくことだともいえる。日蓮は、その意味で法華経にとかれた常不軽菩薩の「人を敬う実践」こそ仏法の要諦であることを「崇峻天皇御書」で強調している。

「不軽菩薩の人を敬いしは・いかなる事ぞ教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」⁽²²⁾

「仏性」を開発するといっても、それを掘り当てれば、到達点に達するので、あとは何もしなくてよいということではない。自他の「仏性」を信じて、その顕現のために「一念に億劫の辛勞を尽」⁽²³⁾くしていく戦いの「瞬間の生命」こそが仏であり、如来なのであると池田氏は述べている。⁽²⁴⁾

その意味で、アンジェラさんのケースにおいて、注目すべきは、いやがらせをする同僚の幸福を祈ることと彼女が意志的に選択したことである。他者の幸福を祈るといえるのは、慈悲の行為であるが、最初の時点において、それは、自然にあふれでる慈悲に突き動かされての行為だとは必ずしもいえなかった。友人からすすめられたときも、彼女は、このような行動が不可能に思えて、いったんは拒絶している。しかし、やがて友人の助言を受け入れ、アンジェラさんは、自分を憎む相手の幸福を祈るという困難な課題に挑戦することを心に決めるのである。

同僚の幸せを祈り始めたのは、そもそも自分の苦悩を解決しなかったからである。その時点では、彼女の悩みは、被害者としての悩みであり、相手がいかなる自身の不幸からそのような行為に及んだのか、思量する余地などはない。それよりも、相手から与えられた精神的苦痛に心がおおわれてしまい、もがくことで一杯である。相手の幸福を祈りはじめたからといって、最初から心から祈れたわけではないかもしれない。し

かし、相手のことを祈ろうとした時点から、それまでは救いを求める立場であったのが、今度は救う実践へと向かい始めることによって、心の方向性が大きく転換したといえる。そして、「祈る」という行為によって、その方向転換が確固たるものとなり、状況の大きな好転という結果をもたらしたという仮説を立てることは可能である。

自他の仏性を信じようと決め、祈りによって、その潜在的可能性を顕現させようと努力する姿勢は、「誓願」にも通じるといえよう。

仏法においては、「誓願」は、四弘誓願などすべての仏・菩薩が衆生救済のために立てるべきもので、仏法思想の重要な柱である。

池田氏は、日蓮が竜の口の法難について、「これほどの喜びをば・わらへかし」⁽²⁵⁾と言いつける大境涯に、誓願の力を見、「深き誓いと正しい理想に生きた時、人間の心は無限大に広が」⁽²⁶⁾るのだとしている。また「五濁の末法に、人間が人間として生き抜くには、誓願の力が大切」であることを強調している。⁽²⁷⁾

ここでの「誓願」とは、いうまでもなく、決まった形に従って行うような儀式としての「誓願」をさしているのではなく、「自分にも他人にも仏性があることを信じてみよう」と決意して行動する、自発能動の行為のことである。そうやって行動に踏み出した時点では、本当に仏性があることを実感、確信しているわけではない。しかし、「実感してみよう」と決意して、実践していく中で、アンジェラさんのように、本当に相手が変わったことで、実感できるのである。池田氏は、日蓮の生涯を末法の本仏の境地として例にあげながら、「常に『誓願』があつて『悟り』がある」⁽²⁸⁾としているが、アンジェラさんの場合にあてはめてみると、「やってみよう」との決意が「誓願」にあたり、やってみて確かな結果が出ることで、人間の秘められたポテンシャルを実感した、つまり「悟った」というように敷衍できらるだろう。

では、他者の幸福を願い、祈ったとしても、それは果たして相手に通ずるのだろうか。

仏法の世界観は、「縁起」思想にもとづいている。つ

まり、生命は、互いが互いを生じさせていて、Aという存在はBという存在があつて成り立ち、AがなければBもなく、Bがなければ、Aもない。そして、AもBも固定的に存在しているのではなく、互いに影響を与えながら変化している。と同時に、やはりAはAとして、BはBとして存在しているのである。

日蓮は、万物間の相互作用について、「大風吹けば草木しづかならず・大地うごけば大海さはがし、教主釈尊をうごかし奉れば・ゆるがぬ草木やあるべき・さわがぬ水やあるべき」と⁽²⁹⁾いつている。人間同士の関係も縁起の法則に支配されているがために、自身が変われば、相手も必然的に変わるのである。

3

現代社会において、人々が、愛情や慈しみを求めながらも得られないで苦しむ、あるいはそうした人間的な感覚が麻痺してしまつてゐるといった状態に陥つてゐる場合が多くみられる。ともすれば、慈悲や愛は、人間性の自然な発露だから、自然に出てくるのを待つ

ていけばいいように思われるが、実は、潜在的に人間にそなわつてゐるそうした性質を顕在化させるための意志が必要なのである。絶対的幸福を得ようと思つたらば、人間は、「愛する力」を磨き、強めていかなければならない。

池田氏の指導するSGIの信仰実践・運動は、人間が真に幸福であるために、人間をより深く愛していくための修練を互いに切磋琢磨しながら行うものである。そうした積み重ねこそが、真の平和への確かな道であるといえよう。

注

- (1) 牧口常三郎(一九七二)『聖教文庫』創価教育学体系Ⅰ』聖教新聞社 一五二―一五三ページ
- (2) ナヴィン・チャウラ(二〇〇二)『マザー・テレサの愛の軌跡』日本教文社 二七四―二七五ページ
- (3) B・ラッセル(一九九二)『岩波文庫』ラッセル幸福論』岩波書店 六〇ページ
- (4) L・トルストイ(一九九二)『人生の道』(筆者訳)『ИИ. Толстой. Путь жизни/Толстой. ИИ. Путь жизни. соч. в 91 т. М.: Худ. Лит-ра. Т.45. С.481』

- (5) 池田大作(一九九二) 池田大作全集第三巻『二十世紀への対話』聖教新聞社 五八三ページ
- (6) 同 五八四ページ
- (7) 同 五八七ページ
- (8) 池田大作(二〇〇二) 聖教ワイド文庫『法華経の智慧』第四巻 聖教新聞社 九四ページ
- (9) 同 二〇七ページ
- (10) 池田大作、「池田SGI会長の『人生は素晴らしい』第二部 第三十回 スペイン舞踊の巨匠 オリヴェラ夫妻」聖教新聞 二〇〇四年十月二十三日付
- (11) 「スッタニパータ」一四九―一五一(中村元訳)
- (12) 中村元(一九七三)『慈悲』平樂寺書店 八八―八九ページ
- (13) 同 四八ページ
- (14) 『日蓮大聖人御書全集』(一九五二) 創価学会 七七六ページ、「御義口伝」
- (15) 池田大作(二〇〇二) 聖教ワイド文庫『法華経の智慧』第六巻 聖教新聞社 九三ページ
- (16) 『妙法蓮華経並開結』(二〇〇二) 創価学会 六二五―六二六ページ
- (17) 池田大作(二〇〇二) 聖教ワイド文庫『法華経の智慧』第六巻 聖教新聞社 九五ページ
- (18) 同 九六ページ
- (19) 同 九七ページ
- (20) 前掲『二十世紀への対話』五八六ページ
- (21) 同 五三四ページ
- (22) 『日蓮大聖人御書全集』一一七四ページ、「崇峻天皇御書」
- (23) 同 七九〇ページ、「御義口伝」
- (24) 池田大作(二〇〇三)『御書の世界——人間主義の宗教を語る』第一巻 聖教新聞社 一六ページ
- (25) 『日蓮大聖人御書全集』九一四ページ
- (26) 池田大作(二〇〇三)『御書の世界——人間主義の宗教を語る』第二巻 聖教新聞社 一〇一ページ
- (27) 同 第一巻 三〇ページ
- (28) 同 第一巻 四四ページ
- (29) 『日蓮大聖人御書全集』一一八七ページ、「日眼女造立 釈迦仏供養事」
- (えぐち みつる／東洋哲学研究所委嘱研究員)